

「弄璞集」補注——「秋夕和歌」について——

Supplementary Notes on Rohaku-shu

—In Relation to Shuseki-Waka—

中西健治

先に近世私家集の一である良女の「弄璞集」についての概要をまとめ、その延長として元禄年間の私撰集「細江草」が「弄璞集」所収の良女詠歌と重なることを述べた。未開拓の分野の比較的多いとされる近世和歌史研究の一素材として、新出の「弄璞集」についてもできる限り多くの補完的な考察が必要であろう。本稿は近く刊行される『弄璞集 本文と索引』（和泉書院刊）の解題に組み込めなかつた補注の一つである。

○

大阪市立大学附属図書館の森文庫と内閣文庫とに良女の歌集がある。前者は「南柯秋夕百首」、後者は「秋夕百五十首」と題する小さな歌集で、いずれも「弄璞集」中の「秋の夕暮れ」を第五

句とする一連の歌群と重なる内容のものである。「弄璞集」写本全五冊のうち、第一冊目（「弄璞集 上」）の三十丁（オ）から七丁分が「秋の夕暮れ」歌群に相当しており、これと右の二歌集とを比べてみると、そこに載せられている歌のほとんどが「弄璞集」の歌群と重なってくるからである。「弄璞集」をもととして両歌集が編まれたものか、あるいは先に何らかの「秋の夕暮れ」歌群だけをまとめた歌集があったのを「弄璞集」や両歌集が各々まとめたのかは定かではないものの、「弄璞集」にみられる七丁分の「秋の夕暮れ」歌群が、まずは基本的なかたちであったようである。「弄璞集」には一連の歌群の前にやや長文の序が記され、およそ作者でなければ述べ得ない表現が見受けられることから、そのように推測するもので、この五冊本のうち第五冊目の、いわゆる拾遺本以外は良女自筆に成ると判断されることも有力な裏付け

となるものであろう。⁽³⁾ その序文とは次のとおり。

秋夕

自余の哥はさらにもいはず秋の夕ぐれをとまりにてやがてその心をいひのべんとすればことにはたらずあまれるやうにおぼえて身づからの心にさへかなひがたく侍るからもしやと思ひ出るにまかせてよみこゝろみて書ならべけるが百五十余首に成にけりかくおなじことをおほくいふにだに哥などいふべきは一首もなければそのよしあしをえりわかむ事さへ我とはわきまへ侍らねばしばらく書つけをきてたづねさだめんとなりこれをおもふに古人の哥などの世にいひつたへて秀逸なるは一二首といへどもいと大切の事にこそ思ひしり侍しか

「秋の夕ぐれをとまりにてやがてその心をいひのべん」、「もしやと思ひ出るにまかせてよみこゝろみて書ならべける」など歌群の創作意図に深く言い及んでいること、「身づからの心にさへかなひがたく侍るから」、「哥などいふべきは一首もなければ」と作者ならではの謙辞が加えられている。これに対して、「南柯秋夕百首」では「秋の夕暮れといふをとまりにてその心をよめる百首歌」とあり、右の序文の冒頭近くの箇所に対応している。羽山蘭子編「細江草」も「弄璞集」から二十九首を抜き出しているが、「秋の夕暮れ」歌群から五首を一まとまりのかたちで掲げるとき、「秋の夕ぐれといふ事をとまりにて百五十余首よみける哥のうち」⁽⁴⁾ という詞書を付していることは、「南柯秋夕百首」の序文と相通

うものがある。内閣文庫蔵「秋夕百五十首」に至っては、内題に「秋夕和歌 良玄法師」とのみ記され、ごく機械的に編まれている集としか思えないものである。これらのことから、「弄璞集」の一連の歌群のかたちをもととして、「南柯秋夕百首」「秋夕百五十首」、さらには「細江草」が編まれたとみて大きな誤りはなからう。

○

ところで、「弄璞集」とは良玄と称した近世初期に活躍した文人の私家集である。歌自体はとくに傑出したものはなさそうではあるけれども、一人物が三千百余首を遺しているという事実、そして何よりも良玄なる人物にも注目しておく必要がある。

良玄はもと南可（柯）と称し、加茂に住み大いに文芸活動を展開していた。先に触れた刊行予定書の解題の中に、上野洋三氏の御稿に成る「隔賞記」に見える南可（良玄）の記事を網羅した詳細な南可年譜を戴くことができた。これを一覽することで彼の活動内容の全貌が容易に浮かびあがってくるはずである。もちろんかねてからも南可についてはわずかながらの資料によって、文芸活動の存在が知られていた⁽⁵⁾ のではあるけれども、「弄璞集」が出現したことによって活動の具体的内容が一挙に鮮明になったというべきであらう。

さらに注目すべき事実として、南可自らが筆を執り多くの和歌に関する写本を校合し、識語を付していることも判明した。財団法人青山会の管理にかかる桂園舎文庫の写本・版本群のうち、主として歌書の写本に「一校了」とか「一旦一校」と墨書し、その下に南可と判読できる小さな朱印を捺しているのである。⁽⁶⁾これら南可校合本の詳細については稿を改めざるを得ないけれども、この少なからざる点数の南可校合本を具さにみることによっても、彼の活動の実体がより確かに判明することは必至であろう。

○

本題にもどろう。

大阪市大の森文庫蔵「南柯秋夕百首」(九二一・一五八・NIS)は、「春曙百首」「新題百首」(いずれも蘭洲桂山⁽⁷⁾の作)と合綴されている。内題は無く、詞書に続いて百首の和歌が七丁に書写されている。「弄璋集」との若干の歌順の異同の他は、歌についてはとくに問題とするべき箇所はない。注目されるのは、この百首歌の末尾に付されている三行の記事である。

右之百首良玄法師詠哥也

千時寛文十二年冬 従五位下保岳廿二歳

良玄旧名南柯又ハ保葉又ハ保岳と云

この三行は奥書というにはいささか不十分な記述で、一行目は書

物の内容、二行目はこれを書写した年時と書写者、三行目は書写者についての考証かと思われるけれども、本書の祖本にこの三行がもとから並んでいたのではあるまい。少なくとも一、二行目と三行目の記された時期は異なっていたはずであり、また、一行目と二行目についても吟味を要しよう。あたかもこの箇所の上部に小竹園主人、森繁夫氏自らの考証付箋が貼付されている。曰く、

右之百首云々ノ一行ハ「千時寛文十二年冬……」ノ行ノ次ニ書クベカリシナリ 保岳ノ伝ハ賀茂社家史ニテ判明、カード

ニ詳記セリ寛文十二、廿二歳モ合致セリ、カード錦織保葉参

照

小竹園

小竹園とは「大阪近辺では屈指の民間蔵書家として知られた」⁽⁸⁾森繁夫氏の号。「日本における主として近世以降の有名無名の文人、学者らの伝記資料になるものをたんねんに収めている」⁽⁹⁾文庫として森文庫は知られている。その森氏自ら筆を執り、錦織保葉を保岳、南柯、そして良玄とが同一人物であると判断して、保岳の伝記をも確認され、寛文十二年(一六七二)に二十二歳なることも符合することから、いよいよ誤りなきものとしてカードに記されたうえでこの簡記を貼付されたものと思しい。⁽¹⁰⁾たしかに、例えば『近世人名録集成』をみると次のようにある。⁽¹¹⁾

129 錦織保葉 元岡本 姓加茂

慶安四辛卯年(二三一)生

正徳五乙未年(二三七五)九月

初名保岳、保丘称采女

号南柯

十二日歿 六五歳

良玄

有栖川宮家侍臣譜

加茂県主年齢次方

これはこれで尊重すべき記録である。ただし、この保葉は記すごとく六十五歳で没している。一方、「弄璞集」を編んだ良玄は明らかに六十五歳以上で歌を詠んでいることがあり、「弄璞集」第四冊目の写本（「統弄璞集 下」）の奥書には「延宝辛酉五月下旬於遠州浜松城下書之 七十才 良玄」とあることから、錦織保葉は「弄璞集」作者とはまったくの別人であると判断せざるを得ないのである。¹²⁾

それでは何故にかような奥書めいたものが記されたのかが問われよう。考えられることの一つとしては、森氏の見解と異なり、もともと一、二行はこの順で並んでいたとみて、あるいは寛文十二年に保岳が筆写したのではないかとみることに、即ち、寛文十二年冬、二十二歳であった保岳は、存命し活躍中の良玄の歌集を手習とすべく写しとったのではないかとみるのである。当然、良玄と保岳とは別の人物である。げんに、黒田月洞軒の狂歌集「大団」の元禄六年（二六九三）の条に、「良玄といふ人、秋のゆふぐれといふことを五句めによみぬる歌百五十首よみて集にせしを見て」と詞書して、「百五十首露をつらぬくことの葉はながむ

るうちにあきのゆふぐれ¹³⁾と詠んでいる「集」とは、おそらく「秋の夕暮れ」歌群を指し、それはまた「弄璞集」に組み込まれる以前の本か、あるいはその歌群のみで一本に仕立てた歌集のことをさすのではないかと思われ、月洞軒自身はともかくも独立した「集」を見ていた可能性が高いのである。このことを支えとしてさらに推測すれば、この記事より少し前の寛文年間にも「集」として扱われていた可能性が皆無とはいえず、したがってこの一、二行を無下に退けてしまうにはしのびない。「右之百首良玄法師詠哥也」とする記述には、良玄の多くの歌の中から抜きだした独立した「集」であることのニュアンスも感じとれるようである。あるいは、森氏の指摘どおり本歌集が寛文十二年に書写され、その後何らかの機会にこれが良玄法師の歌とわかって付記され、保岳が良玄と改号していることを知った後人のさかしらに発して最後の一行が考証的に追加されたのではないかと推測できよう。いずれにしても小竹園主人の付箋に発展したのは三行目の考証文ではあったのである。

○

内閣文庫蔵「秋夕百五十首」（和・一五六三〇）もまた、良玄の「秋の夕暮れ」歌群を収めている。

本書の表記上の特徴は仮名表記が多く、「弄璞集」が表記の点

にまで配慮しているのと違い、上句と下句とを一行ずつに書き、流麗な筆致である。つまり、南可自筆の「弄璞集」では第一首目から百首は「秋の夕暮」、続く五十首の第五句は「秋の夕暮」と表記し、残りの二首を「あきの夕暮」と書いているのに対して、「秋夕百五十首」では、「あきの夕ぐれ」「秋の夕ぐれ」「あきのゆふぐれ」「あきの夕暮」などと種々の表記をしているのである。「弄璞集」は良玄自筆であることから、表記の点にまで意が払われていたものと思われる。

さて、「秋夕百五十首」は表題とは異なり、百五十一首を収めている。「弄璞集」では百五十二首が収められていることから、末尾の一首を脱落させている。いま歌順という問題に絞って検討するならば、大旨「弄璞集」百五十二首の歌順に等しいように見受けられるものの、若干の異同がある。その歌順異同に関する箇所のみが分かるように先の「南柯秋夕百首」を含め、表を作成した。(表I参照)

「南柯秋夕百首」はあらかじめ百五十二首の中から百首を採る方針であったためか、ちょうど百首目までを抜き出している。ただ、本来、三八九のあるべきところに四六五があり、四六四のところ
に四六六、四六五のところに四六四、四六六のところに三八九があるというように、いささかの違いがある。なぜこのようになっているのか、うまく説明はつきそうにないけれども、何らかの書写の際の単純な過失と、一応、みておこう。もちろん、あく

(表I)

「弄璞集」	「秋夕百五十首」	「南柯秋夕百首」	「細江草」
376	376	376	526
377	377	377	527
378	378	378	528
379	379	379	530
380	380	380	・
381	381	381	529
∴	∴	∴	
388	388	388	
389	389	465	
390	390	390	
∴	∴	∴	
463	463	463	
464	464	466	
465	465	464	
466	466	389	
∴	∴	∴	
475	475	475	
∴	∴		
493	493		
494	・		
495	495		
∴	∴		
502	502		
503	・		
504	504		
∴	∴		
524	524		
525	526		
526	525		
527	527		
・	2747		

* 数字は「弄璞集」の通し番号。「細江草」は『近世和歌撰集集成』の番号による。

までも「弄璞集」を基準にした考えであって、「南柯秋夕百首」が現存「弄璞集」とは別の本に依っていることが仮に明らかになったならば、改めて考え直さねばならないことは言うまでもない。

これに対して、「秋夕百五十首」では「弄璞集」所収歌全体を収める態度で臨んだと思われるけれども、中に四九四（一九首目）と五〇三（二八首目）の歌を欠落させ、五二五と五二六の歌順を逆になっている。これもごく単純な過失とみられようか。ただここで注意すべきことは、最末尾の歌が「弄璞集」には見られないということである。見られないという言い方は適當ではなく、「まれにきてとふ人もなし八十までいく田のもりの秋の夕ぐれ」の歌は、実は「弄璞集」写本五冊のうちの、いわゆる拾遺本に存在する歌（二七四七）なのである。

拾遺本はその写本の表紙中央に「続弄璞集」と外題を墨書し、その右肩と下方にそれぞれ「四冊之外」「滅後門弟子拾遺之」と付している。これによれば、拾遺本は良玄の自撰から外れた歌、あるいは、晩年の歌稿から門人によって撰ばれ編まれた歌集ということになる。

「秋夕百五十首」編者は「弄璞集」の「秋の夕暮れ」歌群（あるいは「秋の夕暮」集）を眺め、その全体を採ったうえで、末尾に拾遺本に「秋夕」と題する十六首のうちの一首を撰び出して集の棹尾を飾ろうとしたのではなかっただろうか。「まれにきて」の歌がとりわけ優っていたのではなく、四九四、五〇三の二首を

脱落させたため、結果として百五十首に一首足りないことになり、拾遺本の「秋夕」歌群を参照したというのが、案外、真相なのかも知れない。もっとも「秋夕百五十首」の依ったものが、「まれにきて」の歌をも収めた歌群のかたちであれば話は別である。しかし、今のところそのような本は他に見当たらないし、良玄の八歳の賀は元禄四年（一六九二）に祝われていることが拾遺本の記事から窺われ、それ以降の確かな年代の歌が見られないことから、「まれにきて」の一首はおそらく良玄最晩年の歌と美しいということを考慮するならば、「秋夕百五十首」編者がとくに末尾に加えた特別な一首であつたと解することも、あながち荒唐無稽な考えとは言えないのではなからうか。ともかくも「秋夕百五十首」には、ある意味での編纂意識があつたと理解できるのである。

○

ところで、「弄璞集」写本五冊は、現在、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校の青山記念文庫に所蔵されている（以下、「青山本」と略称）が、別にもう一本がある。青山記念文庫と兄弟関係にある桂園舎文庫所蔵本（以下、「桂園本」と略称）がそれである。正確には青山本「弄璞集」上・下に対応する写本一冊、「続弄璞集」上・下に対応する写本二冊の計三冊¹⁶で、青山本は拾遺本を除く四冊が良玄自筆であるのに対し、桂園本は別人の手である。自作の詠歌を

撰集し書き留めようとしている青山本には良玄ののびのびとした筆遣いや書き込みなどが見受けられるのに比べ、桂園本にはその雰囲気は取り除かれ、できるかぎり祖本に忠実に写しとろうとする筆致が感じられる。しかしながら、「秋の夕暮れ」歌群について両本を仔細に校合してみるならば、当然、若干の異同を見いだすことはできる。示せば次のとおり。

(1) 歌順の相異

青山本 三八二・三八三

桂園本 三八三・三八二

(2) 朱傍線の有無

青山本 「忘れなむとすればかゝる心かな あないひしらず秋の夕暮」(四二三) ……右傍上二「統古有同等哥」

ト朱書、歌全体ニ朱線ヲ施ス

桂園本 四二三ノ歌ノミ

(3) ミセケチ・書き込みの有無

青山本 「うきにそふあはれよさ^いねば^や……」(四四二)

桂園本 「うきにそふあはれよいさや……」

青山本 「柴の戸の垣ねとびかふむらすとめをの色さへ……」

(五一四) ……「の色」ヲ一筆テ続ケ、「の」ノ右傍

下ニ「か」ヲ小サク墨書スル

桂園本 「柴の戸の垣ねとびかふむらすとめをの色^ナさへ……」

(4) 表記の相異

○第五句「秋の夕暮」について

青山本 「秋の夕暮」(二首目から百首目まで)

「秋の夕暮」(続く百五十首目まで)

「あきの夕暮」(残り二首)

桂園本 「秋の夕暮」(二首目から百首目まで)

「秋の夕暮」(続く百五十首目まで。但し、百四、百六、百七、百八、百十三、百十五、百十六、百十九首目の八首は「秋の夕暮」)

首は「秋の夕暮」

「あきの夕暮」(残り二首)

○その他

青山本 「我袖のつゆだにあまる……」(三九九)

桂園本 「我袖の露だにあまる」

青山本 「うしといひあはれといふも身を思ふころのほか……」(五二三)

桂園本 「……身を思ふ心のほかの……」

百五十二首中、穿鑿してこれだけの異同箇所しかないということ
は、歌順の過失は措くとして、桂園本が祖本を重視しつつ書写していたことを窺わせるものである。

○

最後に「南柯秋夕百首」「秋夕百五十首」、青山本、桂園本の四

本を、青山本を底本として校合し、異同のある部分を抜き出して
列挙しておこう。他の三本は右に挙げた順に、「南」「秋」「桂」
で略称し、番号は「弄璞集」の通し番号による。

三九〇 わきてなとなかめわふらん

(南) わきてなと (秋・桂) わきてなと

三九八 吹かへす葛のうら風これも又

(南) をのれさへ (秋) これもまた (桂)

これも又

四〇一 うかりける世にはこころを^①残さしのねかひにかなふ^②

① (南) おもひを (秋・桂) こころを

② (南) 心に (秋・桂) ねかひに

四二四 なれたにもなくねはよきよ

(南) 声をは (秋) 鳴音は (桂) なくね

は

四三三 いつとなく思ひはたぬ身のうさになれすはいかに

(南) なれすか (秋・桂) なれすは

四四五 松風のをとするかたを

(南・桂) 松風の (秋) 松風に

四四七 いてさらはあるにまかせん

(南) いさゝらは (秋・桂) いてさらは

四五九 わかれつるあかつきはかりうき物と

(南) うきものと (秋) うきものは (桂)
うき物と

四六三 うきことの数そふのみはいつはりの

(南) のみか (秋・桂) のみは

四七九 そのことゝ思ひもわけてなかわるは

(秋) なかわるは (桂) なかわるは

四九一 身ひとつのうきにも人のつらさにも

(秋) つらき (桂) つらさ

四九六 空たかくつらにをくるゝ鴈の声そをたによきよ

(秋) そなたに (桂) そなたに

五〇〇 思ひやるかひもあらしなさひしきは

(秋) あかしな (桂) あらしな

。

以上、「弄璞集」にみられる「秋の夕暮れ」歌群について知り
得た若干の事柄を覚え書きとして記しておいた。良玄(南可)の
文芸活動を具体的に示すものとしての「弄璞集」については、ま
だまだ多くの検討課題があるはずである。加えて、南可自らが校
訂した写本群についても、今後の究明が俟たれるところであろう。

注

(1) 拙稿「青山記念文庫蔵弄瑛集研究序説」(「兵庫国漢」第三十五号、平成元年三月)

(2) 拙稿「『細江草』所収の良玄詠歌」(「相愛国文」第四号、平成三年三月)

(3) 右が「弄瑛集」の筆跡、左が南可の印を捺す「古今口伝集」(青山記念文庫蔵)の識語の筆跡である。

春の風吹分るの山花の顔かきも里も花のうら
好乃苑

白榜之一遍有密字以誰際分尚野遊千種

此一帖近來雖流布世不知作者誰人然
難以兼引京極黃門云玩詞犯言量云
恐是千載不易之論乎

(4) 上野洋三氏編『近世和歌撰集集成』(地下編)所収の「細江草」による。「秋の夕暮」の五首は右書の526から530に見える。

(5) 「古今夷曲集」には南可の狂歌が収められ、「隔賞記」にも度々触れられている。また、田中善信氏著『初期俳諧の展開』所収『「隔賞記」の連俳資料(三)——周令と南可——』にも言及がなされている。

(6) 注(3)参照。参考までにもう一例を示しておく。(青山記念文庫蔵「源氏物語男女装束抄」より)

始終を誤る可ぬ正本也

一校了

なお、このことについては上野洋三氏の研究がある。(平成三年十一月三十日、十二月一日に鹿児島大学で開かれた日本近世文学会秋季大会で、「賀茂の南可について」と題して発表されている。)桂園舎文庫の所蔵本には、南可の手を經ている写本が多く見出されている。その多くは和歌に関する本であることも注目すべきであろう。本文庫の所蔵本については目下、上野氏と筆者とが共同で目録作成に向けて準備中である。

(7) 五井蘭洲(元禄一〇年(一六九七)——宝曆十二年(一七六二))のことか。

(8) 神作光一氏監修『全国「文庫・図書館」ガイド』(一八九頁)

(9) 注(8)に同じ。

(10) 森繁夫氏は『歌歌人評伝篇』(昭・6刊)所収の「近世歌人人名辞彙」や『古筆鑑定と極印』(昭・18刊)などを執筆・出版されているように、人物考証の面に詳しい研究者である。

(11) 『近世人名録集成』(二二三頁)

(12) 良女は延宝辛酉(天和元年(一六八一))に七十歳であることから、慶長十七年(一六一二)に生まれていることが判明する。錦織保葉の生誕は慶安四年(一六五二)であり、両者には約四十年の差がある。

(13) 狂歌大観刊行会編『狂歌大観』所収「大団」による。

(14) この番号は「弄瑛集」写本五冊について全歌を整理するために付した通し番号である。以下、とくに断わらない限り同じ。

(15) 次の歌が元禄四年に詠まれていることがわかる。

「八十のとしほととぎすを 忍び首は先こゝになけ時鳥さ
月まつべきわがいのちかは」(二六四九)

(16) 書誌の概略は次のとおり。

「弄瑛集」……袋綴、二七・七×二〇・四種、半丁十一行、八十
四丁、一首一行書、外題左肩直書、内題ナシ

「統弄瑛集」……袋綴、二八・五×二〇・七種、半丁十一行、五
十九丁(六十九丁)、題簽左肩(「上」「下」八直書)

(17) 統古今集卷四・秋上の「そでのうへにとすればかかるなみだか
なあないひしらず秋の夕ぐれ」(中務卿親王)との類似をさす。

(付記)

本稿は相愛大学特別研究助成(平成三年度)による成果の一部である。